

タイトル	地域における子育て支援の実践から学ぶこと —こども館、児童館、障がい児通所指導サービス事業所の視察とインタビューを通して—
作成者(著者)	藤井房雄
作成者(ヨミ)	フジイ, フサオ
出版社・団体	下関短期大学保育学科
出版社・団体(ヨミ)	シモノセキタンキダイガクホイクガッカ
Niii資料タイプ(区分)	研究報告書(教育実践記録等)
ISSN	—
掲載誌名	第30回 下関短期大学保育学科 創作発表会研究発表要旨集
巻・号	—
開始ページ	4
終了ページ	5
発行日	2017/12/9

下関短期大学
〒750-8508 山口県下関市桜山町1-1

Copyright©2017 Shimonoseki Junior College All rights Reserved.

地域における子育て支援の実際から学ぶこと

— こども館、児童館、障がい児通所指導サービス事業所の 視察とインタビューを通して —

下関短期大学 保育学科 (担当教員：藤井房雄)

乳幼児支援研究ゼミナール 2年 伊藤好香、渡邊知聖 1年 小笠原摂樹、柿本夏希

1 研究の目的

保育学生の2年間はあまりにも短く、子どもを取り巻く環境(主として子育て支援施設)についてまで広く理解することは極めて困難である。そこで、幼稚園・保育園・認定こども園以外の地域における子育て支援施設を実際に訪問し、どのような目的で、誰を対象に、どのような活動しているかを知り、地域における子育て支援の実際を広く学ぶことを目的とした。

2 研究の方法

地域の子育て支援施設に関する知識が全く無い状態からのスタートであったため、先ず下関市内の子育て支援施設の調査から始め、その中から、訪問可能な施設を選出した。

また、方法としては、計画→訪問(施設見学・質疑応答)→反省・考察を1サイクルとした。質疑応答の中では、支援の内容、指導の際の喜びや困難点及び施設としての今後のあり方について質問をし、将来の保育現場での心構えの一助とすることとした。

3 研究の内容

地域の子育て支援施設に関する予備知識が全く無かったため、先ずインターネットを活用して下関市内の施設調査から始めた。訪問するにしても、その施設に関する多少の知識を持っていないければ質問項目を考えることができず、何よりも訪問先に対して失礼であると考えた。

特に、質問項目を考えることには多くの時間を要した。施設の実際を知らないだけに、いろいろな場面を想像しながらの検討になり、今回の研究で一番苦労した点といえる。

以下、今回訪問して聞き取りを行った3つの施設について、その内容を報告し研究の内容とした。

(1) ふくふくこども館

下関市が次世代育成支援拠点施設として、子どもの健全な育成と子育てをしている家庭の支援を図るために開設された施設である。

基本的には、館内施設を利用した子どものあそびを通じた親子、子ども同士、親同士の交流の場と言えるであろう。

また、館内には相談室が設けられ、子育てに関する相談を受け付けている。中でも、保育士、幼稚園教諭、保健師、看護師などによる特別相談は、子育てに悩む保護者の力強い味方となることであろう。

今後は、市民への周知に一層力を入れ、利用者数の拡大に努力したいとのことであった。このことが、所期の目的達成につながるであろう。

下関市の中心部に位置し、交通の便がよく、指導員の目が行き届いた安全な施設である。そして、使用料無料ということが何よりも魅力であり、多くの方にお勧めの施設である。

(2) 児童館「ひこまる」

児童館とは、健全なあそびを通して健康増進を図ると共に、情操を豊かにすることを目的とする児童厚生施設のひとつである。

下関市内には、「ゆたか児童館」、「ひかり童夢」、「宇賀児童館」と、今回訪問した「ひこまる」の4館あり、利用対象者は、幼児と保護者、小学生を主としている。

それぞれの児童館では、児童厚生員を中心に、地域の人材を活用しながら地域性を生かした特色あるイベントを開催し、児童館の目的達成に向け献身的に取り組んでいる。

ここでの聞き取りで注目したのは、「児童館＝子どもの単なるあそび場」との先入観が崩れた点である。

子育て中のほとんどの保護者(主として母親)は、何らかの悩みを持っており、その悩

みの解消の場になっているという。

さらに、母親の心の安定をより一層図るため「母親クラブ」を立ち上げ、自主運営することによって人的環境の構築にも取り組んでいる。

現在、利用者数が足踏み状態で、市民への周知が十分でない点が課題のひとつであり、今後広報活動に一層力を入れたいとのことであった。

(3) 障がい児通所支援サービス事業所 「そよ風」

障がい児通所支援サービス事業所は児童福祉法第6条の2に規定されている施設で、児童福祉法という児童（18歳に達するまでの者）を対象としている。

ここでは、児童発達支援（日常生活における基本動作の指導、知識技能の付与、集団生活への適応訓練等）と放課後ディサービス（生活能力向上のために必要な訓練、社会との交流の促進等）を行っている。

費用は、保護者の世帯収入によって違い、送迎の有無によっても違ってくる。

障害の態様によって支援の方法が違い、一人ひとりの一つひとつの言動に対応することが必要であり、基本的に本人の言動に肯定的対応を取りながら、本人の意欲の喚起を目指している。

また、管理責任者さんの「個別の支援計画を基に、個人的支援と集团的支援とを使い分け、わずかな変化を期待して支援にあたっている。」という言葉から、支援の難しさを感じると同時に、熱意と強い使命感を感じ取ることができた。

なお、これまでは、3年以上の経験を有していれば誰でも指導員として勤務できたが、来年度からは、有資格者（児童指導員、保育士等）に限定されるとのことだった。

現在、旧乳児院を利用して事業に取り組んでいるが、個々の子どもに適した支援に取り組むには十分な環境とは言えない。入所児童が増加しつつある現在、限られた施設の効果的活用について考える必要に迫られているとの話があった。

4 研究の結果と考察

「2 研究の方法」で、訪問の際の質疑応答の中で、「支援の内容、指導の際の喜びや困難点及び施設としての今後のあり方」について質問したいと述べた。

支援の内容と今後のあり方については研究の内容で触れたので、ここでは、指導の際の喜びや困難点を中心に述べ、結果と考察に替えたい。

まず、支援に際しての喜びであるが、全ての指導者の方が口にされたことは、「子どもの笑顔」、「保護者の笑顔」、そして「子どもの変化」であった。また、子どもの話になると表情が非常に明るく、言葉も弾んでいたことが印象深い。このことは、将来のある子どもたちに対する温かい心と思いやりの心の現れ以外の何物でもない強く感じた。

併せて、強い使命と責任を持って子どもたちに相対しておられることも感じ取った。

次に困難点であるが、それぞれの方から種々の具体的事例が語られた。しかし、全ての指導者の方に共通していたのは、「子どもを第一に考えたときには困難と正面から向き合うことができ、困難を乗り越えた後には子どもの笑顔がある。」との思いが必ず付け加えられたことである。

中でも、「技術は後から、愛情は最初から。愛情の無い者に技術は付いてこない。」と話された一言が忘れられない。保育者としての心構えは、正に、この一言にあるのではないだろうか。

授業の中で「関係機関」という言葉が出てくる。どのような施設が関係機関であるのかは教科書の中では理解できる。しかし、その業務内容については理解できていないに等しい。

今後、保育者として現場に立つことになるが、社会的経験が乏しく子育て経験もない者が、子育てに悩む保護者の相談に的確に対応できるとは思えない。また、園の対応にも限界があることも考えられる。その際、必要となるのが関係機関に関する情報であろう。

今回の施設調査及び訪問で、少しではあるが関係機関・施設に触れ、その必要性も理解できたように考える。

将来、保育現場で保護者の信託に応えられるように、今後引き続き研究に取り組みたい。

【謝辞】

最後になりましたが、今回の訪問を快く受け入れていただき、きめ細かなご指導をいただきました。ふくふくこども館、児童館「ひこまる」、障がい児通所支援サービス事業所「そよ風」の関係者の皆様に心からお礼申し上げます。